

## 生誕 150 年記念 藤島武二展

練馬区立美術館（中村橋） 2017.07.23～09.18

「藤島武二」（1867～1943）は、明治～昭和の日本洋画壇において、“**耽美な女性像や抽象的な風景画**”といった常に新鮮な作風で日本洋画壇をリードしてきた洋画家で、1937（昭和12）年には最初の「文化勲章」を受賞している。

本展では、今年が画伯の生誕 150 年記念年に当たるため、国内外の師を仰いだ作品を通じて、画伯の作品の形成にスポットを当てている。

### 《婦人と朝顔》 1904年 油彩・カンヴァス



モデルの女性は上向きでこちらを見ているが、視線は何も見ていないように宙をさまよい、髪型や衣服はあたかもギリシャの女性の雰囲気を持たせている。

背後には垣根にからまって咲く大輪の「朝顔」が女性の頸部を取り囲むように描かれ、女神を飾る花冠のようであり、「満開の朝顔」を背景にして朝日を浴びる女性を美しく描いて、「朝という概念」を表現しようとした作品である。

若い婦人の新鮮なプロフィールと朝顔がとても美しく描かれて「**美の競演作品**」とされている代表作である。

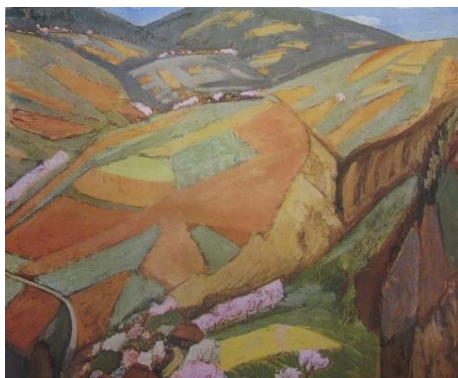
### 《ローマの遺跡》 1908～09年 油彩・板



ローマ近郊の風景画で、遺跡の前に立つ二本の老いた「糸杉」は、その歴史ある遺跡を復元するかのよう上方に真っすぐ伸びている様子が描かれている。

すっきりとした青空と強い日差しに照らされたレンガ色の遺跡の茶色との色彩コントラストが、鮮明な印象を与えるために安定感のある作品となっているが、左側の樹木の描写はやや不安定である。

### 《耕到天》（たがやしててんにいたる）1938年 油彩・カンヴァス



画伯が戦跡を巡る大陸旅行から帰国し作成した代表的な「風景画」で、「第2回新文展」に出品された作品である。天に届くまで余すところなく耕された日本国土への讃美と、その一角にささやかな生活を営む勤勉な国民への称揚が込められている。

大陸での戦跡の荒廃を眺めてきた画伯の眼を洗い直すかのような感がある作品とされる。